

次々と画風を転換した異才 司馬江漢（1747―1818）

生前に遺言を公開した奇人

生前に遺言を用意する人々は多数存在します。ダイナマイトの開発により巨額の資産を蓄積したA・ノーベルは死亡する約一年前の遺書にノーベル賞の創設を記載しており、それが現在まで忠実に実行されています。イギリス国籍の学者J・スミソニアは一度もアメリカを訪問したことがありませんでしたが、首都ワシントンにスミソニアン協会を設立するために遺産を寄贈すると遺言し、それによって博物館群が実現しました。

しかし死亡する以前に遺言を公開する人物は例外ですが、死亡の六年以前に遺言を記載しただけではなく、それを何人かの友人に送付し、そのまま世間から隠遁してしまつた有名な人物がいます。あるときどうしても出掛けなければいけない用事があつて外出したところ知人に出会ってしまいました。驚嘆した知人が挨拶したところ「死人は発言しない」の一言で遠去かっていきました。今回は、この風変わりな人物を紹介します。

浮世絵師春信の代筆として活躍

この人物の本名は安藤吉次郎、世間では司馬江漢という名前で有名な江戸時代の画家かつ学者です。一七四七（延享四）年に江戸の四谷で町人の家庭に誕生しましたが、後年、芝新銭座に移転しています。司馬という名前はその町名に由来するとされています。一五歳になった一七六一（宝暦一一）年に父親が死亡したため、母一人子一人の生活をし、母親が一七七二（安永元）年に死亡するまでは独身で生活していました。

父親の死亡を契機に駿河台狩野派の絵師狩野美信（洞春）の弟子になりますが、画法が自分の趣旨に一致しないと判断、一九歳になった一七六六（明和三）年に浮世絵

師鈴木春信の弟子になります。春信は一七六〇（宝暦一〇）年から役者絵を発表して人気絵師になり、浮世絵に多大な影響をもたらした人物です（図1）。そこでは春重という名前で仕事を手伝っていましたが、一七七〇（明和七）年に春信が四五歳で死亡してしまいます。

当時二四歳であった江漢は版元の要請もあり春信の画風を継承し、落款も春信とした美人画を制作しますが、女性の容姿は当然として、画面の上部に雲形を配置し、そこに『古今和歌集』や『千載和歌集』など古典から抜粋した和歌を表示する形式も踏襲し、一見では春信と見分けがつかないような作品を数多く制作しています。しかし、そのような既存の画風を模倣することに満足できない江漢はさらなる前進をします。



図1 鈴木春信「中納言朝忠」

宋紫石の弟子として唐絵を習得

当時、中国の絵画は「唐画」とか「唐絵」と名付けられ注目されていました。一七三一（享保一六）年に中国から長崎に渡来した画家の沈南蘋（しんなんびん）は写実的な花鳥画の名手ですが、その弟子となった楠本幸八郎はやはり一七五八（宝暦八）年に中国から渡来した宋紫岩にも師事し、宋紫石を名乗ります。一七六四（宝暦一四）年に江戸に帰還した紫石は中国直伝を売物にして一世を風靡する有名絵師になりました（図2）。



図2 宋紫石「岩に牡丹図」



図3 宋紫石『物類品騭』の図版

紫石には数多くの唐絵の作品が存在しますが、対象を正確に描写するという唐絵の特徴を明確に表現した図版もあります。この時代に活躍した平賀源内という学者が一七六三(宝暦一三)年に刊行した『物類品騭(ぶつるいひんしつ)』という一種の百科辞典がありますが、そこには数一〇枚の植物などの図版が掲載されています。すべて線画ですが、植物の特徴が簡潔明快に描写されています(図3)。その画家が紫石でした。

江漢は一七七二(明和九)年末に江戸で紫石の弟子になります。それは上記の紫石の自然を正確に描写する筆法に感銘し、それまで手懸けてきた日本の画法が通俗だと理解したからのようです。そこで名前を唐風にしなければ風雅ではないという紫石の言葉により、姓は司馬、名は江漢とし、ここに司馬江漢が誕生するとともに画風も一気に唐風に変化し、草花や鳥類を忠実に描写した作品を制作しています。

蘭学人士と出会い銅版画に挑戦

このように江漢は狩野美信、鈴木春信、宋紫石などに師事して画風を変化させてきました。さらなる変化をもたらしたのが平賀源内でした。源内は本草学者、地質学者、医者など科学分野だけではなく、蘭画家(画号は鳩溪)、戯作者(風来山人)、浄瑠璃作家(福内鬼外)、俳人(李山)など芸術分野でも活躍した異能の人物ですが、家財道具をすべて売却して『ヨンスターン動物図鑑』を購入したというほど蘭学にも傾倒していました。

江漢は二七歳のとき源内の弟子となり、鉢山探査に同伴しますが、発見の見込みがわずかだと鉢山開発は断念します。しかし三三歳になった時期に源内との関係で蘭学を開拓していた前野良沢や大槻玄沢と出会うことになりました。良沢は杉田玄白、中川淳庵、桂川甫周とともにオランダの医書『ターヘル・アナトミア』を『解体新書』として翻訳した人物で、玄沢は良沢と玄白の弟子で『解体新書』の翻訳を改定した人物です。

江漢は、それらの学者が研究していたオランダの書籍に記載されていた銅版画の制作方法を会得し、一七八三（天明三）年に日本で最初のエッチングによる銅版画を制作しました。それは「三囲景」という題名で、隅田川左岸にある名所の三囲神社の周辺を描写し、筑波山も遠望する光景の作品です（図4）。しかもその作品をレンズを通して鑑賞する「眼鏡絵」にして、後述の全国を行脚するときには各地で紹介しました。

さらに江漢は油彩画にも挑戦しています。日本で油彩画は一八世紀前半に登場しており、江漢が最初ではありませんが、源内の情報などにより荏胡麻油と顔料を混合した絵具で天明年間から寛政年間（一八八〇年代）にかけての作品が存在しています。その題材の多数は自身で所有していた一六九四年にオランダで出版された画集『人間の職業』を手本にしており、自身の独創による題材はそれほどありません（図5）。



図4 「三囲景」(1783)



図5 「西洋樽造図」(寛政年間)

平賀源内を発端とする人脈に出会ったことにより、蘭学に目覚めた江漢は蘭学の原点である長崎への旅行を実行すべく、江戸に妻子を滞在させたまま、一七八八（天明八）年四月に長崎を目指して一人で出発しました。東海道を移動して途中で鳥羽に立ち寄り、大和路を経由して八月に大坂に到着、以後、中国路を進行して一〇月一〇日に目的の長崎に到達しました。その途中での様子は『江漢西遊日記』として記録されています。

そこには好奇の精神満々の行動が表現されています。一般の人間が簡単には出入りできない出島のオランダ商館を訪問し、年末から翌年の正月にかけては長崎平戸の生月を訪問して捕鯨を見物する機会があり、捕獲した巨大なセミクジラの背中から周囲を見渡している墨絵が存在しています（図6）。帰路には江戸で面識のあった備中足

守藩主の木下石見守を訪問し、シカの狩猟に参加するなど、様々な体験をして江戸に帰還しました。

それ以後も何度か遠出をしており、一七九九（寛政一一）年四月には大坂から紀州を訪問していますが、江漢の祖先が紀州出身であったことから、紀州の藩主にも謁見しています。この旅行についての詳細な日記は記録されていませんが、『吉野紀行』などに何枚かの絵画が掲載されています。それらの大半は浮世絵風ではなく、風景を忠実に描写した西洋画風の作品になっており、江漢が方向転換したことを明示しています。



図6 「江漢西遊日記」

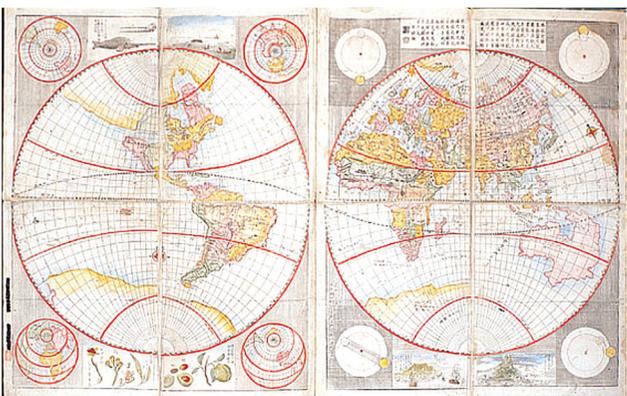


図7 「地球図」(1792)

画家から科学に領域を拡大

江漢は源内の手引きによる蘭学者との交友から、当時の世界の先端の地理学や博物館に接触する機会があり、それに関係する作品も制作しています。まず世界地図です。長崎のオランダ商館の医師J・A・ストウツエルが一七八八（天明八）年に江戸に参府し、貴重な世界地図『ジャイヨ世界図』を持参しましたが、機会があって、それを模写して『地球図』として一七九二（寛政四）年に発表したのが江漢でした（図7）。

さらにオランダのF・デ・ウィットが一七世紀後半に制作した北天と南天の天空の星座を描写した『天球図』も一七九六（寛政八）年に模写し、星座には中国や日本の名称を記入しています。このような地図だけではなく、天体の仕組についても知識を入手し、「天球図」と同時に『和蘭天説』として発刊しています。N・コペルニクスの地動説が出版されたのは一五四三年ですが、それについても簡単に説明しています。

一九世紀になった文化年間の初期には太陽と月の表面を『天球全図・太陽真形図』『天球全図・月輪真形図』として発表しています。これは自身で天体観察した成果ではなく、スイスの学者で司祭のA・キルヒヤーが一六六五年に発表した『地下世界』の図を模写したものとされています。しかし長崎のオランダ商館を外国との唯一の窓口としていた鎖国時代の日本で貪欲に最新情報を入手していた鋭敏な感覚には驚嘆します。

生前から死亡通知を発表

ここまで紹介してきた業績だけでも相当の人物ですが、画業では大和絵、浮世絵、唐絵、眼鏡絵、油彩画など次々と画風を変更しながら数多くの作品を制作し、科学の分野でも世界地図、天球全図を出版するなどの業績を発表しています。しかし、世間の評価は両極で、一七九八（寛政一〇）年に発表された当代の人物評価番付では低位でした。そのような評価も影響してか、六七歳になった時に奇矯な行動を実施します。

一八一三（文化一〇）年の自称七六歳（実際は六七歳）のとき、自身で自画像入りの死亡通知を作成し、各地の知人に送付したのです（図8）。要旨は「江漢先生は老衰により絵画の依頼があっても対応せず、蘭学や天文も面倒になり、吉野や京都に滞在して、今春、江戸に帰還、誠拙禪師の弟子となって大悟し死亡した」という内容でした。実際は五年後の一八一八（文政元）年に七二歳で逝去するという数奇な人生でした。

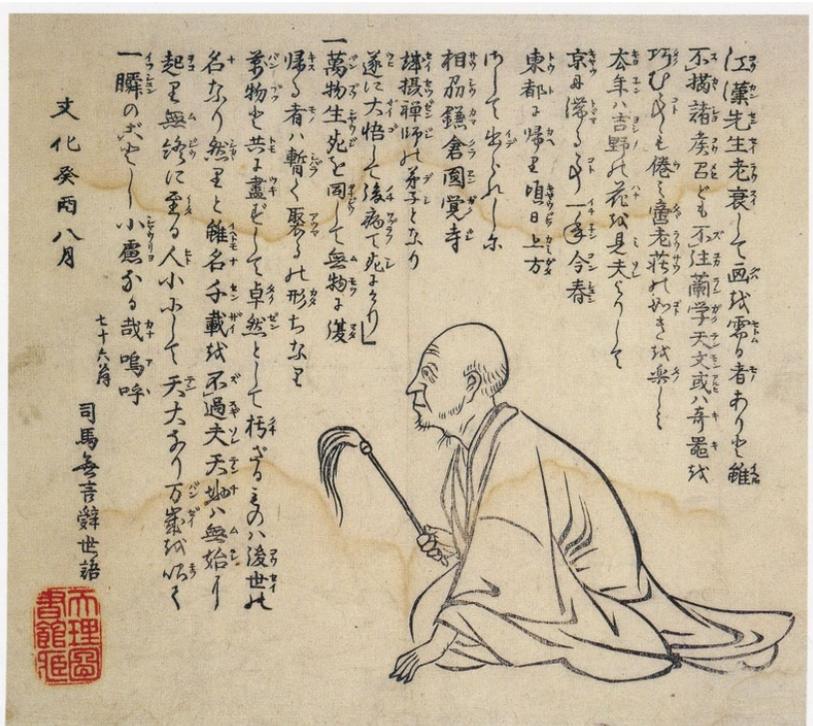
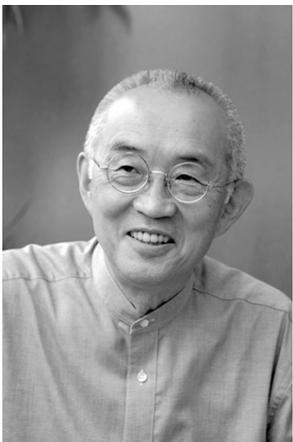


図8 「司馬無言辞世語」(1813)



つきお よしお 1942年名古屋生まれ。1965年東京大学工学部卒業。工学博士。名古屋大学教授、東京大学教授などを経て東京大学名誉教授。2002、03年総務省総務審議官。これまでコンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策などを研究。全国各地でカヌーとクロスカントリーをしながら、知床半島塾、羊蹄山麓塾、釧路湿原塾、白馬仰山塾、宮川清流塾、瀬戸内海塾などを主催し、地域の有志とともに環境保護や地域計画に取り組む。主要著書に『日本 百年の転換戦略』（講談社）、『縮小文明の展望』（東京大学出版会）、『地球共生』（講談社）、『地球の救い方』、『水の話』（遊行社）、『100年先を読む』（モラロジー研究所）、『先住民族の叡智』（遊行社）、『誰も言わなかった！本当は怖いビッグデータとサイバー戦争のカラクリ』（アスコム）、『日本が世界地図から消滅しないための戦略』（致知出版社）、『幸福実感社会への転進』（モラロジー研究所）、『転換日本 地域創成の展望』（東京大学出版会）など。最新刊は『凜凜たる人生』（遊行社）など。